

# 山口文象とその時代

## 年譜 戦後の山口文象

戸市、「建築文化」50・6月号）久ヶ原教会（東京・大田区、「新建築」50・9月号）、高林邸（東京・渋谷、「新建築」50・6月号）

座談：「デザインと構造に関する座談会」（「建築文化」10月号）

1951年 昭和26 49歳

### この頃から共同設計組織について模索

後に山口は、RIA結成に関してこう語っている。(21)

「（事務所を解散して）それで私いろいろ考えたわけですよ。・・・建築というものはやっぱり自分だけの才能で頑張って実際にいいものができるかという、今まで建築事務所を独立してやってみた自分の経験からいって、何か矛盾するんですね。これはやっぱり共同で設計し、共同作業で建築というものはできあがるんじゃないかというふうに私は私なりに考えたわけです。・・・それから、従来の事務所のようにひとり儲けるんじゃないかと多勢で儲けたらいいんじゃないかということ。・・・本当に優秀なタレントといっしょに仕事ができれば、自分も育つし、その人も育つし、また新しい組織の形体ができてくるんじゃないかという、そういう意欲があったんですね。・・・名前を・・・Research Institute of Architecture というのがイニシアルをとればRIAで語感もいいし、これが一番いいだろうと思ってきめたのが、11年前（編者注：1951年にあたる）の8月か9月ごろです。（このころは）まだひとりですよ。」

著述：アンケート「1951年を送るにあたって」（「新建築」12月号）

1952年 昭和27 50歳

### RIAグループを結成

山口のもとに三輪正弘と植田一豊の加わるRIAグループの動きが始まった。後に山口は語っている。(21)

「そのころ新建築の編集をやっていた三輪君がよくだべりに来てましてね、植田一豊という優秀なのが九州に居るから呼んだらどうかといってくれたんです。・・・2、3ぺん手紙の往復をしたかな・・・必ず一緒にやらせようからという約束をして、仕事を待っていた。

それでこんどは大久保という人が住宅を建てたいと・・・今の金にすれば200万か250万円ぐらいですね。これがひとつ来たわけです。・・・私がスケッチして、植田君もやって来たりなんかしてはじめてたわけですよ。・・・そしてあれが第一作としてでき上がったわけですよ。それから大阪の堺の大日本製糖・・・一億いくらだったかな・・・それからまあ本格的RIAがスタートしたわけです。

そこへ三輪君が「新建築」の編集をやめてはいつて来た。植田君から半年か一年遅れたかな。それからこんどまた一年ぐらい遅れて近藤君がいつて来た。近藤君がいつて来たのは、猪熊君が、こんど早稲田を出る人で、自分の洋画研究所にいる近藤君というのが、どうしても山口のところへ行きたいからなんとかしてくれないかということです。はじめの出発はそういうことです。」

RIA創設の山口の相棒となった三輪正弘は書いている。(57)

「RIAという名称は、このグループのリーダーとなった山口の苦心作であった。Rはresearch、Iはinstituteだから、まあいつてみれば建築調査研究所ということになるのか、会う人ごとに意味をきかれて出まかせの返事をしているうちに、何となくイメージが私なりにできあがってしまった。・・・instituteはデザイン研究の内的な分野であり、チームのdiscussionをその中枢としていること、researchは足を使い歩きながらのデータ集積や多くの階層職種の人々との交渉ということではないか、と自答する格好になってきたのだった。

この設計協同のチームのイメージは、戦前から続いてきた山口文象事務所を解散した山口が、一人黙居し沈潜していた時期に、いわゆるアトリ工務所をアウフヘーベンするものとして目論まれたものだ

1949年 昭和24 47歳

### 山口文象建築事務所を解散（2月ごろ）

事務所解散時の事情について、山口は後に語っている。(21)

「私が戦前からやってきた山口建築設計事務所をどうしてやめたのかということ、終戦後、つまりまず第一番の旗じるしが進駐軍の仕事をしないということ、それから防衛庁の仕事をしないということ。それから、その当時ヤミで儲けた人たちがキャバレーをこさえたなんかして、・・・そういうものを拒否しちゃったわけですよ。」

その拒否したばかりでなくて、私の経営能力というものが非常に弱いんですよ。・・・非常にへたなんです。だから仕事がだんだんなくなっちゃってきて、本当に尾羽打ち枯らし・・・差し押えは3度ぐらいくっちゃいました。・・・そのうえ丸の内事務所が接収されたので、そこから転々として、ここへ仕事を頼みに来ると、そういうのは困ると私はことわるでしょう。・・・山口建築設計事務所は戦時中26人いたんですが、それがだんだんめしが食えなくなってくる。それから終戦後、二・一ストをピークとして、つまり共産党の華やかなりし時代ですね。それでうちの山口事務所の人たちも必然的に傾斜していった。・・・そこに久ヶ原教会の仕事が来たんです。そのほかにも住宅もくるんです。すると、この住宅はどこの会社の重役のだから、そんなものやれるか。という説が出てくる。じゃ久ヶ原の教会はどうか、これは宗教は阿片だからわれわれのやるべきものじゃないということで拒否される。・・・経済的にだめになって、払えなくなっちゃったんです。そのうちにみんなやめちゃって、退職資金なんかうちのものを全部売っても出せない仕立てでした。それで私ひとりになっちゃったんですよ。」

事務所解散にあたって、青写真コピーで2分冊の「山口文象建築事務所設計工具寄宿舍平面計画集成」を編集して所員に配布した。

### 新制作協派協会に建築部を設立して参加

この年、猪熊弦一郎らと図って、美術団体の新制作派協会に建築部（後にスペース・デザイン部）をつくった。新制作派協会は、1934年に内田巖、佐藤敬、猪熊弦一郎、小磯良平らが、洋画の国家統制に抵抗して結成した美術家団体であった。そのリーダー猪熊は、回想して言う。(49)

「新制作のことでいえば、ちょうど文ちゃんが高松近代美術館や久ヶ原教会をつくっていたころ、僕は新制作の中に建築部がなくはないかと主張した。そして、まず誰を集めようかということ、文ちゃんに相談した。その結果2人で、丹下健三君、池辺陽君、前川さん、それから谷口吉郎さん、吉村順三さんと岡田哲郎さん、剣持勇君、それに文ちゃんと、その時代のトップ級のアーティストを選び出した。この建築家たちが、次の時代のイニシアティブをとるだろうと僕は考えた。1949年（昭和24年）のことだった。しかし、僕がそう考えたのは、その裏に文ちゃんがいたからである」

作品：早川巍一郎邸（東京・練馬）

講演：「創字社建築会について」（10月21日 明治大学講堂 NAU歴史部会主催の「日本近代建築運動史講座」第2回講演会）

1950年 昭和25 48歳

新制作派協会で神戸博覧会の施設を設計し、山口は「ゲート」と「序曲館」（木造シェル構造）を担当した。

作品：千葉邸（12月 新宿、「新建築」54・3月号）神戸博覧会序曲館（神

が、ベルリン時代山口の師であったグロピウス教授がアメリカで試みたTACのイメージがあったことは想像にかたくない」

### 「ローコストハウス」を発表

東京都美術館で開催された第十六回新制作派協会展（9月21日～10月7日）に、RIAグループ（山口、三輪、植田）として、12坪平屋の木造実物大のモデルハウスを「ローコストハウス」と名づけて、「金24万円（坪単位2万円）也」の正札付きで出品展示して話題となった。

このとき山口は、西欧諸国では社会政策として進めている住宅政策が日本では遅れていると指摘し解説する。(51)

「我々のローコストハウスは、アメリカの組み立て住宅のごとく高度化された工場生産技術に依るものではない。一部の構造部材と建具はPre-Fabricationに依存することは考えられるが、他の大部分は現場施工であって、特別度の技術を要しない。壁は従来の小舞を掻いた真壁である。・・・Walter Gropusは、建築家は豪壮な個人住宅を芸術作品として誇示している時代は過ぎた、建築家は社会を構成する衆のために奉仕しなければならない、という意味のことをRebuilding our Communityの中で書いているが、研究所のメンバーは夫々に職場を持つメンバーが殆どTACのように同じ研究課題に集って自由に構成している。Ideeもまた彼とともにあり、我々は研究所の仕事をこのIdeeで貫きとおしたいと希っているのである」

近藤正一は後に、RIAの「げいじゅつの時代」の作品として、時代背景とともに解説している。(57)

「芸術の時代は、ローコストハウスから始まる。52年、新制作展にこの実物が金24万円也の商札をばら下げて登場したとき、多くの建築家たちは「あまりに極端なローコストは、住宅の質をますます低下させるものだ」と反対を表明した。この批評は社会に向っては当を得ているけれども、RIAに対しては当てはまったとは思えない。当時の世相から、どうしても社会主義的な色彩のもとで芸術作品をプレゼンテーションしなければならなかったのは、RIAの主宰者山口文象の場合だけとは限らない。ちょうど、同齡の前川国男も、コストの差こそあれ、プレモス住宅という量産化の庶民住宅を発表したのもその当時である。したがってこのローコストハウスの流れをくむ、大久保邸、小町邸のような、決してローコストでない住宅で、同じ手法による、すぐれた芸術作品を発表することも可能であったわけだ。・・・この当時の住宅は、いずれもアメリカのモダンプランの影響を受け、その表現は真壁構造、構造材露出の手法を徹底している。まさに一作一作が写真になる芸術であった」

ローコストハウスは、現実に「高橋邸」として建設されて、一時は三輪正弘が住んだことがある。

この年、「婦人朝日」の住宅欄に山口の名で1年間執筆して単行本となったが、原稿はすべて植田が書いた。

### 備庵会をはじめ

この頃から、高木金次（明治生命社長）と三枝博音（社会学者）を中心にして、「備庵会」（びあつかい）と名づけた陶磁器を楽しむ会を財界人たちと始め、山口も夫妻で参加していた。当時、三枝主宰の東西文化研究所が仲四号館のRIAに同居していた。(60)

**作品：**ローコストハウス（高橋邸 東京・目黒、「新建築」52・10月号）、大久保邸（東京・目黒、「新建築」53・6月号、「国際建築」53・7月号、「世界建築全集」14）、土田邸（東京・久ヶ原、「新建築」53・7月号）、川上邸（埼玉・入間市） 関東学院グレース記念講堂（神奈川・横浜市、「新建築」52・10月号、「建築文化」52・11月号）

**著述：**「住宅」（山口文象 朝日新聞社刊）、「懸賞設計競技—現代の住宅—

社会史に於ける位置」（「新建築」52・7月号）、「我々の問題としてのローコスト住宅—直面せる住宅事情」（「新建築」52・10月号）、「懸賞設計競技—現代の住宅—一気の附いたこと」（「新建築」52・11月号）、「住宅相談室」（1年間「婦人朝日」連載）

1953年 昭和28 51歳

### RIA建築総合研究所を設立

1953年1月10日、設計組織としてのRIA建築総合研究所(The Research Institute of Architecture)を発足させて、山口は戦後の再出発を果たした。その場所は解散した山口蚊象事務所のあった東京丸の内の三菱仲四号館で、所員は山口文象、三輪正弘、植田一豊、山口栄一であった。その出発を、植田一豊はRIA最初の経歴書に書く。(52)

「個人経営を排して共同設計チームをつくらうという山口文象に共鳴した三輪正弘と植田一豊の参加を得て、RIAがスタートしたのは1953年、米軍による接収を解除された旧山口事務所の一室でありました。翌年、近藤正一が加わって初期の核づくりが固められたのです。

僅かな仕事しか得られなかったので毎日エネルギーをもてあまし、それ相応に芸術家づいていた彼等は、造形理論についてまたRIAの将来像について議論をたたかわしておりました。横須賀線の鶴見事故で亡くなられた三枝博音博士が、そのころ東西文化交流研究所をはじめられ、部屋がないためにRIAに同居し研究活動をされていました。三枝さんの下には数人の若い研究者がいて、わたしたちと日常をともにしていましたので、お互いに教えられることが多かったものです。毎週共同研究会をもち、報告書を順にきめて芸術、文学、技術、歴史等をかなりひろく関連させながら、3年あまりこのミーティングを続けたのです。

その時期は苦しい経営状態とはうらはらに、いちばん贅沢な時代だったといえるかもしれません」

同じ建物の2階に、三輪正弘の父の政治家・三輪寿荘の事務所があり、後にここもRIAが借りて事務所とした。1970年代の三菱赤レンガ街の建て替えで大手町ビルに、更に2001年には港区港南に移転した。

### グロピウス招聘の準備に参加

国際文化会館が、ロックフェラー財団の特別寄付金を得てワルター・グロピウス夫妻を招くことになり、建築学会に協力要請があり、山口らが歓迎小委員会を設けて検討をはじめた。

**著述：**「住宅志言」（「新建築」53・11月号）、「大田区政会館構案」（「建築文化」53・12月号）、「住宅」（朝日新聞社刊）

1954年 昭和29 52歳

### グロピウスと32年ぶりに再会

ワルター及びイセ・グロピウス夫妻が、国際文化会館の招聘で日本に来たのは5月19日であり、山口は32年ぶりに師と再会した。8月7日までの滞日中に精力的に日本各地をまわり、6月3日に日本相互銀行、厚生年金病院そして日本医科歯科大学（山口出世作の日本歯科医専）を訪ねたが、山口は遅れて駆けつけて案内した。

6月の暑い日、グロピウスが丸の内仲四号館のRIAを山口の案内で前触れもなく訪れた。下着シャツ姿で製図していたその年の新入所員の近藤正一は、山口からグロピウスに紹介されて、とまどいながら握手をした。

7月23日には箱根仙石原にて、グロピウスの講演と当時の代表的な日本の建築家24名との討論会があり、山口も参加した。

この年から長期にわたり継続する神奈川大学キャンパス（横浜）の仕事が始まる。

**作品：**小町邸（世田谷、L'ARCHITECTURE D'AUJOUR'HUI」56・5月号、「新

建築」55・2月号)、神奈川大学計画・校舎・研究室(横浜、「国際建築」54・3月号)、化粧ビル(台東、「新建築」55・10月号)、宮下邸(小金井)、石下保育園(茨城、「新建築」54・8月号)、平井邸(練馬)、辻村真弓邸(中野、「建築文化」55・9月号)、国分寺の集団住宅(東京・府中、「新建築」55・3月号、「建築文化」55・9月号)、大日本製糖柳井工場(「新建築」54・12月号)

著述: 座談会「庶民住宅をどうするか」(「新建築」54・4月号)、「高床式住宅を三つみて」(「新建築」54・5月号)、「海外建築紹介-グロピス」(「建築界」54・6月号)、座談会「国立国会図書館入選作をめぐって」(「近代建築」54・8月号) 鼎談「大日本製糖柳井工場」(「新建築」54・12月号)

1955年 昭和30 53歳

### 建築家の思想について発言が多くなる

9月、東京の国鉄労働会館ホールで開催された「例(零)の会」主催の第一回建築公開討論会「建築家とは」で、前川国男、金子勇次郎の講演に対して質問(「建築文化」1955年11月号)。

5月に日本建築家協会会員となり、この頃から建築家の思想、社会的立場に言及するようになる。(53)

「日本の近代建築家はこうして十年のブランクをどうにか凌ぎ得て敗戦を迎えました。われわれはファシズムの永い間の弾圧から解放され、人間の権利をもう一度に手にすることができました。天皇は人間宣言を発し、マッカーサーによって治安維持法が撤廃されて共産党の指導者達はG・H・Qの前でマッカーサーと共産党の万歳を三唱するというように急角度に状況が発展して来ました。

十年の虚脱はまだ意識的な立ちあがりにはまでは程遠いことでしたが、地底からはかすかながら建設への足ぶみを感じられるようになりました。ここで近代建築家達はそっとあたりを見廻わして見ました。世の中はすでに、自由主義、社会主義、共産主義をいかに大声に叫ぼうとも唯一人咎めるものもない民主主義の時代です。ヤマトイズムの類被りをそっと脱いで、もとのステージへ再登場してきました。そしてこの戦争協力者達は建築における近代精神の先達としての場につきました。

・・・思想の貧困は建築家をアルチザンに格下げするでしょうし、日本の近代建築に先き細りの栄養失調を結果させるでしょう。日本の建築が永い間の植民地性から脱皮し、本来のほんとうの自分達のものを創りだすためには、厳密な自己批判と相互理解の上立った忌憚のない討論がきびしく行われなければならないでしょう。ことに私は私達が重ねた過ちを、これからの若い世代の人達に繰り返してもらいたくないために一層強く望みたいのです」

作品: 神奈川県住宅公社上平間・西寺尾・古市場共同住宅(横浜、「新建築」55・9月号)、公団登戸学寮(川崎、「近代建築」59・2月号)、三宅艶子邸(千代田)、下中弥三郎邸(藤沢、「新建築」55・11月号)、沖中重雄邸(軽井沢)、耳轟の碑(藤沢、「新建築」55・4月号)、レストラン・クラウン(名古屋)、近鉄建売住宅(奈良、「建築文化」57・5月号、「新建築」57・2月号) R H 1(東京・世田谷、「建築文化」57・5月号)

著述: 書評「池辺陽著『住い』」(「新建築」55・1月号) 鼎談「戦前から戦後へ」(山口・三輪・植田「建築文化」55・9月号)、「昨日。今日。そして明日へ」(「新建築」55・10月号)

1956年 昭和31 54歳

この頃より、ぜんそくで苦しむことが多くなる

奈良市あやめ地遊園地で開催の「楽しい生活と住宅博」(大阪朝日新聞社主催)で、鉄筋コンクリート住宅コンペ審査員(3月)

川添登・浅田孝らの企画による建築懇話会第三回の会合において、「和風論」を講演(8月25日)した。

作品: 東京板金工場(川崎、「新建築」57・9月号) 館石旅館(富浦)、荏原実業ビル(東京) 第1森ビル(港)、神奈川大学図書館(横浜)、木島邸(練馬)、岸田麗子邸(新宿)

1957年 昭和32 55歳

### 通称の「文象」(ぶんぞう)を戸籍名とする(5月9日)

作品: 神奈川大学特別教室(神奈川・横浜市)、東京部品蒲田工場(東京・蒲田、「新建築」58・2月号)、昭和磯石綿工場(高崎)、川合信雄邸(世田谷)、日本航空社宅(東京) 旅館山水荘(茨城) 緑成会整体園本館・病院(小平)、大串邸(東京世田谷、「建築文化」58・4月号)

著述: 「家具はだれのものだ」(「建築文化」57・3月号)

1958年 昭和33 56歳

### 集団設計方法と組織原理を模索

R I Aの設計方法について後に山口は言っている。(21)

「設計のプロセスとしてはいろんなことをやってきたんですよ。本当のこといえはまだ固まっていないんです。まだみんなの意見が一致してやったというのはあまりないんですよ。ただ、植田君とぼくとの感覚が非常に合っているものだからね、ツーといえはカーなんです。カーといえはツーなんで、これはどっちがデザインしたかわからないが、ところが三輪君の発想・デザインには抵抗を感じることがありますね。それから近藤君のやっているデザインにもちょっと抵抗を感じるんです。それでやはり4人で相談して、こうしようとか、ああしようとか、このプランは全然こまるじゃないかということをやっているんです」

作品: 神奈川大学本館(神奈川・横浜市、「建築文化」60・2月号) 坂本紙店(福島・平) 野口邸(渋谷・代々木、「新建築」63・6月号) 東京インターナショナル整流器工場(神奈川・秦野)

著述: アンケート「建築教育に対する70氏の意見」(「建築雑誌」3月号)

1959年 昭和34 57歳

### 株式会社建築総合研究所を設立

これまで任意組織だったR I A建築総合研究所を、4月に株式会社として法人登記し、山口は代表取締役社長に就任した。このとき所員数は16名。社名には登記法でローマ字のR I Aをつけることができなかったが、建築総合研究所の名は類例が多くてときに勘違いを起すことがあったりしたので、もっぱらR I Aのニックネームで「リア」とか「アールアイエー」と呼び、後に社名を変更する。

作品: 朝鮮大学校(小平、「建築年鑑」62、「新建築」62・6月号、「国際建築」62・5月号) 大森教会(大田区、「建築」61・5月号) 大阪谷町既製服協同組合会館(大阪) 日本ファイバーアングル工場(山形・新庄、「近代建築」61・10月号) 原町公民館(いわき) 船橋中学校(世田谷) 桜ヶ丘中学校(世田谷) 加村邸(国分寺、「建築文化」60・4月号) 大野邸(品川) 北村邸(東京・四谷、「建築文化」60・4月号) 立売堀地区再開発計画(大阪)

1960年 昭和35 58歳

### 肺気腫で入院

肺気腫を患って東大附属病院の沖中内科に入院した。かなり重かったが奇跡的に回復した。このあとにも呼吸器系の病気で2回入院する。

作品: 美術家会館(中央) 全国金属労働会館(東京) 高根カントリークラブハウス(熊谷) 荏原製作所妙高ヒュッテ(新潟、「建築」62・3月号) 井上孝雄邸(世田谷)

1961年 昭和36 59歳

### R I A所員数16名、住宅設計通算200件となる(57)

この年のR I A所員は16名、個人住宅の設計が53年以来通算で200件となった。

この年の末に交通事故にあって骨折し、東大の外科にかかった。

作品：石打観光ホテル（新潟・石打、「建築」62・3月号）

著述：「せんべい焼」（「木工界」61・1月号）「創宇社建築会のこと」（「建築と社会」61・12月号：これは竹村新太郎が書いたようだ）

1962年 昭和37 60歳

### この頃から組織と個人のあり方で模索

建築家大谷幸夫と対談して、R I Aと自分の次のあり方について模索を始めたらしきことを語る。(21)

「この10年というものの積み重ねは私自身忍耐ですよ。私のオリジナルティーを殺さなければいけないところもあったし、独走しちゃいけないし、そこをうまくやって、どんな勝手なことをいわれても怒らないようにしなければいけないし、この10年間の忍耐は私はほめられていいと思うんです（笑）。この10年間の積み上げがそろそろ効果を現わしていいんじゃないかと期待しているんです。・・・私ができるだけ若い人の中からすばらしいタレントが出てもらいたいと思うんです。これ以外ないですよ。そしてR I Aというものが存続して、みんなが育っちゃって心配がなくなれば、私はR I Aの中に個室をこしらえて、やりたいことをやるという助平根性はあるんですよ」

この年4月から女子美術短期大学非常勤講師となり、服飾科で住居学を講義し、1969年3月まで続けた。

作品：三浦高等学校（横須賀）久ヶ原教会改築（久ヶ原）高根カントリークラブ（埼玉、「建築」63・3月号）美術家連盟会館（東京・銀座、「建築」63・5月号）

著述：対談（1月27日）「近代建築の黎明」神代雄一郎著 美術出版社刊 対談「戦前・戦中・戦後」（新建築6月号）対談「都市計画にヒューマンスケールを」（週刊「建設ニュース」第40号6月第2週号）対談「建築家の姿勢」（週刊「建設ニュース」第41号、6月第3週）「ハイマートローゼ」（「室内」7月号）

受賞：建築年鑑賞（朝鮮大学の設計 3月）

1963年 昭和38 61歳

### 病氣入院して長期療養

1月はじめ容態が悪くなりだし、21日に東大病院沖中内科に入院、翌日より危篤状態となった。2月になって持ちなおし病状は一進一退していたが、ようやく癒えて8月20日に退院し、9月4日事務所に出勤した。

### 三枝博音の遭難死にショックを受ける

同じオフィスにいて長く親交を続けてきた哲学者の三枝博音が、11月9日横須賀線に乗っていて鶴見駅付近の重大事故で遭難死し、山口は大きなショックを受けた。

この年、日本住宅公団を辞した藤田邦昭が入社（～70）、以後R I Aは積極的に都市計画部門へ参画する。

著述：トップレベルの貴重な存在（「佐藤武夫作品集」相模書房63・12月）

1964年 昭和39 62歳

### 日本建築家協会理事に就任（任期2年間）

芸術振興国会議員懇談会の第1回会合に出席（3月26日）

作品：新制作座文化センター（八王子、「建築」64・3月号、「建築文化」64・3月号、「近代建築」64・3月号、「新建築」64・3月号）

著述：「日本不燃建築研究所特集に寄せて一素晴らしき建築家」（「建設グラフィ」1月号）「芝居小屋」（「建築」3月号）「前衛建築家の宙返り」（「新建築」6月号）

1965年 昭和40 63歳

### 東京工業大学の講師となる

この年4月から1970年3月まで、東京工業大学工学部建築学科の非常勤講師として、建築デザインを教えた。ワークショップ方式で

幅広い造形教育に熱をいれて、学生に評判のよい教師であった。

1966年 昭和41 64歳

### キリスト教の洗礼を受ける

久が原協会で4月10日に洗礼を受けたが、唯物論者のはずの山口がキリスト教信者だったとは、親しかった創宇社時代からの仲間たちも、その死まで知らなかったという。

この頃から、組織と作家の関係について山口は悩み、このように書いている。(54)

「R I Aとして社会的な問題に進んでいながらも、私個人としてのなにかをつくりだしたいという葛藤は、心のなかにいつもあります。・・・R I Aは組織による設計の方へ進むことになるでしょう。そうなることこそR I Aの本来の意義だと思います。しかし、私自身は否定しながら、私のなかから大久保邸が現れたように、これからの私というものはR I Aとちがったところへとびだすか、あるいはなかにとけこむか、私自身の心の中にのこる葛藤はいつまでも続きそうですが、私は皆といっしょに行くつもりです」

作品：伊豆富士見ランド（静岡・蘆山町、「近代建築」66・10月号）日本金属工業相模原製造所（相模原市）

著述：「プランニングにおける思想性」（「新建築」5月号）

1967年 昭和42 65歳

作品：神奈川大学記念講堂（神奈川・横浜市）

放送：「下町かたぎと建築家」（日本短波放送「建築夜話」）

受勲：朝鮮大学校遠征計により朝鮮民主主義人民共和国より受勲

1968年 昭和43 66歳

### 黄綬褒章を授章

作品：新大阪センシティ（大阪、「新建築」69・11月号）

著述：座談会「思想と現実の狭間における建築家の意識」（「都市住宅」12月号）

講演：「建築家の雑言」（6月17日東京・住宅公団講堂）「現代建築家の姿勢」（9月20日大阪中の島公会堂）

1969年 昭和44 67歳

### 新建築技術者集団設立に参加

50年代のNAU停滞以来、各地で多くの建築運動団体の離合集散があったが、新たな全国的集合のはじまりとなる「新建築技術者集団」が5月に発足し、山口も参加して幹事となった。

著述：座談会「分離派・東京中央電信局・山田守」（「建築記録／東京中央電信局 日本電信電話公社建築局」）「Walter Gropius」（「建築家」秋季号 日本建築家協会）「山下さん」（「工匠談」山下元靖 相模書房）

1970年 昭和45 68歳

### 新建築家技術者集団設立に参加

先年結成の新建築技術者集団は全国組織づくりに向けて精力的に動き、この年12月に「新建築家技術者集団」を結成した。結成1年で会員数は約千名の大組織となった。山口も初めから参加し、表面に立つことはすくなかったが積極的に運動を支えた。

作品：寺内邸（横浜市）永見邸（世田谷区）

1971年 昭和46 69歳

### 建築家の戦争責任を問う

このころから各種のシンポジウムや講演会において、建築家の社会的責任を強烈に追求する発言で、70年安保世代のアイドル的な存在となる。日本建築家協会の講演会で建築家に向かって言う。(31)

「朝鮮戦争が始まりましたあの時、兵器工場の労働者がどういう態度をとったかということですね。そのために今われわれは、こうやっていわゆる経済アニマルで、洗濯機を買ったり、ドライヤを買ったりし

て一見驚沢に暮しておりますけれども、それだけじゃありませんけれども、つまり朝鮮戦争の時に人殺しの材料をアメリカから注文される、あるいはどこかから注文されてやっていたわけです。自分たちの造っているものはなんであるかみな知っていたわけでございます。一人一人がそれを知っているが黙って来てきた。全部目をつぶってきたわけです。今になってベトナムがどうだとか、アメリカの軍国主義がどうだとかいうことをいっているわけです。こういうふうに、たとえば個人個人の労働者自体が、今自分はこういうものを造っているかということとはわかっていることなのです。それをどういふふうに行動の中でエキスプレッションするかということをしてしないで、させないで20年間それに流されている。これは労働組合ばかりでないが、これが象徴的な日本のありかたであるようです。日本の建築家が背負わされている最もきびしい住宅問題について一言の発言もないのはどうしたことでしょう。この矛盾にみちみちた社会事象について、建築家がもう少しものを考えてきたらなにかそれが行動に現われて来る筈だと思うのですけれども、

また別の機会では、戦場に学徒出陣させた当時の東大総長だった建築家を糾弾して、声高く戦争責任を問う。(9)

「ドイツ、フランスにおいても、少しでもナチに関連した者はすべて挙げられています。ハイデッガーほどの哲学者さえもそうなのです。建築家の中でも、戦前から戦後にかけての作品をご覧になったことがありますか。タイの日本文化会館など、ほかにもいくつもあるでしょう。作品とその説明書をごらんになりましたか。その建築家たちは、いつの間にやら今、日本の近代建築のリーダーとなっているのです。それほど日本人は自己撞着の天才であります。これが人間を考え社会を考え、人間としての建築家でありましょか。もういっぺん考えてもらいたい。いまぼんやりしていると、世界はどうなっているか……」

座談会「建築と演劇」（現代日本建築家全集 11「坂倉準三、山口文象とRIA」三一書房）

作品：是の寺宇（愛知・岡崎市）

1972年 昭和47 70歳

### 建築家のデザイン思想を問う

日本建築家協会で、「建築はどうなる」と題して大谷幸夫と対談(31)。「建築家というのは、あらゆる制約の中でやる仕事でございますね。ですから、社会体制の中で今日のような非常にむづかしい社会情勢の中で、絶えず大小の波調にゆれ動されているわけですが人間として、建築家としてこうあるべきだという姿勢だけは崩すべきじゃないと思うのです。流される建築家ではなく、考える建築家でありたいと思います。……建築家のマスタベーションのはんらんです。それが日本ばかりでなくて世界全体の傾向だと私は思うのです。この傾向をもう少しシャープな目で見、そしてこれに抵抗する姿勢というものを持って、対処していかなければいけないと思うのです。とにかく建築家というものは特異な形の、特異な色のつまり歌舞伎でいえば花道にかかった時の仕手みたいなもので、華やかにスタンドプレーをするということが、ほんとうの新しい近代建築家であるというふうに誤解されてはかなわないと思うのです」

著述：講演「建築はどうなる 体制に流れる建築家ではなく自律的に考える建築家でありたい」（「建築家」72年夏季号）

作品：三国邸（杉並区）、千葉邸（世田谷区）

1973年 昭和48 71歳

座談：「マヴォ」と「創宇社」の時代（「新建」第5号 73）、「生活空間の創造」ワルター・グロピウスについて—山口文象先生にきく—（「建築雑誌」73・11月号）

作品：町田郷土資料館（町田市 現・町田市立博物館 この後、山口は評議員をつとめる）

1975年 昭和50 73歳

### 株式会社建築総合研究所取締役会長となる（4月）

講演：「近代建築の流れを追って」（「新建築家技術者集団福岡支部主催講演会」7月26日）

1976年 昭和51 74歳

### 旧作を訪ねる

この前年あたりから、山口の作品集を発刊する企画がRIAで進行中であり、12月11日はその一環として、山口は佐々木宏、長谷川亮、河東義之、編者らとともに、朝日新聞社、日本歯科大（いずれも今は無い）、清洲橋、浜離宮南門橋、酒井憶尋邸、浄智寺茶席（建築家榛澤敏郎の案内）を見てまわった。久しぶりに旧作を訪ねて、現場で懐かしく解説もして、夕方から北鎌倉の料亭で昔をおおいに語った。そのときの録音テープ（編者所蔵）の内容もこの年譜に入れた。

著述：対談「職工徒弟学校のころ」（「室内」8月号）対談「兄事のこと」（「建築をめぐる回想と思索」新建築社刊 1月）対談「ガラスと建築」（「INAREPORT No.4」伊奈製陶 1976年5月）対談「新制作の四十年」（「新制作の四十年」新制作協会 9月）対談「建築を創る」（日本建築家協会、佐々木宏 10月）

1977年 昭和52 75歳

### 株式会社建築総合研究所取締役相談役となる（4月）

著述：対談「近代建築の目撃者」（「近代建築の目撃者」新建築社刊4月）対談「戦前の集合住宅に取り組み」（「新建築」6月臨時増刊号）「北鎌倉の茶室」（「住宅建築」8月号）「石本書久治氏との出会いのころ」（「日刊建設通信」9月16日号）

1978年 昭和53 76歳

### 昭和建築研究会主催シンポジウムで発言

1月14日、シンポジウム会場に一般聴衆として参加し、司会者から指名で、近代建築の成立から建築家の姿勢を問う長い演説をした。公の場での最後の発言となった。(58)

「ご覧のとおりのお老人でございます、建築活動は大正末期から今日まで、割合に職人的な仕事をしてまいりました。……職人的に建築の設計と、建築家としての仕事を、がむしゃらにやってまいりましたけれども、そのがむしゃらにやっているなかで、人間を考え、社会を考え、世界を考えてまいりました。そこから離れそうな難しい時代でございますけれども、とにかく私は自分なりの考え方から足を離さないで、どんなに貧乏してもかじりついていきたいというふうに考えてまいりましたのですが、いかがでしょうか、こういう問題は……建築家も思想家でなければならぬし、建築家は人間を考えなければならぬ。そういうなかで、建築家自体がどういふふうなやり方をやってきたか。明治、大正、戦争前それから戦争中、戦後、これがどういふふうに変ってきたか、それをもういっぺんお考えねがったらどうかと思います。……」

### 創宇社同人たちが久が原で会合

3月18日（土）梅田穰、海老原一郎、竹村新太郎、平松義彦、山口文象の創宇社建築会同人による会が、久が原の山口邸で催された。突然に76年の生涯を閉じる（心筋梗塞）

著述：「地境に根をおろした建築を」（「建築士」4月号 絶筆）

注：本年譜は「新編 山口文象 人と作品」（伊達美徳 2003 アール・アイ・エー）から、2007・3・10日本建築学会シンポのために抜粋した。